

シベリア抑留記

愛媛県 長野 吉雄

渡満

私は、大正十五（一九二六）年二月七日、愛媛県松山市萱町、父 長野藤次郎、母 タマの次男として生まれる。実家はタバコ、塩、日用品を売っていた。家族は兄、佐世保海兵団入団、弟は国鉄松山機関区に勤務していた。

県立松山商業学校を昭和十七年十二月下旬に卒業し、東亜（《現》日本）交通公社満州支社に入社すべく昭和十八（一九四三）年一月十三日、松山駅を出発し集合場所の下関駅に行く。交通公社から公社の旗を持って迎えに来てくれた。

当時、奉天（瀋陽）駅までの運賃は、三等学割で十九円五十銭だった。赴任者は十五人で、下関港から夜、関釜連絡船に乗り、早朝、釜山港に入港した。

翌日、最終駅の奉天に昼過ぎに到着した。交通公社満州支社は、奉天省奉天市千代田区の「大和ホテル」の前にあったと思う。

一月十八日、入社式があり、一週間くらいの子定で新入社員の研修教育が行われた。引き続き大連、旅順の研修旅行があり、大連埠頭、大連市内、星海公園等を見学した。翌日、日露戦争激戦地二〇三高地や、水師營等を見学した。

研修旅行から帰社してレポートを提出し、配属地が南満州の鞍山案内所に決定した。奉天の南八〇キロの所にある鞍山市は鉄の町として有名で、中国全体の四分の一の生産量を誇っている。交通公社は全満州の主要都市に案内所があり、全満州、北支、朝鮮、日本全域に鉄道の切符を販売するのが主な業務であった。昭和十八年二月十日ごろ、鞍山に赴任する私達新入社員四人は昼前に鞍山駅に到着した。

案内所の人員構成は、所長一人、日本人、男性六人、女性七人、中国人六人、計二十人である。挨拶は現在、你好（ニイハオ）だが、当時は你咆飯完了碼

(ニイチイハンワンラマ あなた、めしはすんだか) だった。

昭和十九年六月十八日、中国大陸からB 29の空襲が前後三回あった。第一回は満州製鋼所が目標となり、爆撃された。突然に白い飛行隊が現れ、製鋼所に爆弾を落とす。

私は木銃を持ってウロウロするばかり。日本軍陣地(鉄西方面)から高射砲をドンドン撃つても、B 29の下で炸裂するだけで全然当たらない。後で聞いたことだが、日本軍の高射砲の射程距離はせいぜい七〇〇〇メートルから八〇〇〇メートルくらいで、高度一〇〇〇〇メートルのB 29には当たらないはずだった。

朝鮮、中国人の驚きと戦争に対する不安は大変なもので、翌朝早くから切符を求める人達が事務所に殺到した。

人々は動揺を来し、鉄西の中心地では「天翻地覆! (天地がひっくり返るぞ)」喊声を伴い爆発的な叫びとなった。現地人の日本人への態度も変わった。

昭和二十年四月ごろになると世相が怪しくなり、李

海泉さんが「近く日本は負ける」と平気で言い出す。

私は、モンゴル軍が日本に攻めて来た文永の役と弘安の役の大暴風のことを話し、「今に神風が吹く」と反論する。すでにこのころになると、満州知識階級の人達の間では、日本の敗戦を知っていた様子だった。

五月十一日、東満の綏南第八四八部隊への入営通知が来る。十八日、朝礼後みんなに挨拶し、集合場所の鞍山警察署に行き、点呼を受け、鞍山駅南出札口に向かう。

現役兵で入営

昭和二十年五月十八日、鞍山駅を十時に出発し、奉天、新京(長春)、哈爾濱に着き、さらに哈綏線(哈爾濱―綏芬河)を夜行列車で翌朝の五時ごろ、ソ満国境最終駅の綏芬河駅の一つ手前、綏陽駅に到着する。軍隊炊き出しのにぎり飯大一個、たくあん二切れを左右の手に持ち、昼過ぎに第八四八部隊に到着した。

直ちに部隊編成に入り、私は一応、第三機関銃隊黄心隊たまに配属。中隊長は岡田中尉(幹候出身)、さらに

中隊の中で再編成があり、私は幹部候補志願兵として山口班に入った。

入隊した人は、若い現役兵（十九歳〜二十歳）と、第二国民兵の四十歳〜四十三歳の老兵で、この時代は、人生わずか五十年といわれていた。

綏南は以前、戦車一個連隊、歩兵二個連隊の兵舎があったが、入隊時は八四八部隊一個連隊だけで、他は空舎になっていた。当時大本営は、戦局の悪化に伴い、戦局を立て直そうと関東軍の精鋭兵団を昭和十九年、なんと十二個師団が南方戦場へ転用された。同時に、国境要塞地の大口径砲、砲台火砲まで南方戦場へ送られていたので、とても近代戦を戦える状況ではなかった。私達が入営した時、関東軍は作戦上、今の国境線を一〇〇キロ後方の穆稜まで下げ、陣地構築のためやっきになっていた。部隊の中身は古年兵は少なく、これといった火砲もなく、未教育の新兵だけでなく、もし日ソ開戦となればどうやって戦うか、心細い限りであった。

七月上旬に穆稜に移動する。毎日炎天下のもと戦車

壕の構築に追われ、その上、夏場と重なり雨も降り、宿舎は幕舎（テント）生活、食糧事情は悪く、特にめしの量が少なく、いつも腹ペコの状態であった。

日ソ開戦（穆稜の激戦）

開戦時の関東軍は、二十四個師団のうち二十一個師団が昭和十九年六月以降の新編成師団であり、もはや昔日の偉容はなく、戦力としては実に八個師団の力しかなかったと言われる。八月九日昼前、突然飛行機が現れ穆稜駅目がけて機銃掃射を始めた。私達は、灼熱の太陽のもと陣地構築に汗を流していた。みんなが空を見上げて、「あれは何だ！　どこの飛行機だ！」と叫び出し、空を見つめた。間もなく作業中止、大急ぎで帰隊した。

中隊長より、日ソ開戦となったことを知らされた。私は指揮班に選抜された。連隊の中核となり、指揮命令の連絡と、連隊長と軍旗を守護することだった。各人に小銃一丁と弾薬六十発、手榴弾二発、缶詰や携帯口糧（乾パン類）が渡された。

ソ連軍の対日参戦は、我々には大きなショックであり、「来るべきものがついに来た」と感じるとともに、現在の関東軍の兵員・装備から見ても絶対負ける。そして在満邦人や我々はどうか、早く和平をするように祈るばかりであった。ソ連軍は、囚人部隊を先頭に、東西北の三方面から、なだれをうって進入した。同時に、北朝鮮、南樺太、千島にも攻め込んできた。そのうち、陣地内が騒がしくなってきた。トラックで運ばれて来た弾薬箱が道路端のあちこちに山積みされ、また綏西方面から牽引されて来た重砲、野砲が続々と並べられた。指揮班が小高い山に登り下を見下ろせば、重砲隊が一列に並び、その前に歩兵が散開し、遠く前方に向かって砲弾を打ち出し、まるで戦争映画でも見ている感じだった。

翌朝になると、ピューンピューンと弾が飛んできた。砲弾のうなり音で、前に後ろに、近くに落下するのを自分で判断するには、ある程度の時間がかった。

穆稜の戦闘において、我が第一二四師団は一万五千

人の兵力で、十倍のソ連軍と戦った。援軍も弾薬補給もないまま戦い、生き残ったのは一二〇〇人に過ぎない。そのうち、穆稜鉄橋死守に行った戦友達は、全員戦死の噂が流れた。

夜間になると自動車の音が聞こえ出し、夜空に曳光弾が飛び交い、まるで花火を見ているようだった。

翌朝、弾丸の音がしない時間帯に、戦車の音がだんだんと近くに聞こえ出した。恐る恐る頭を上げ、右側の道路面に殺到する戦車を見た。

私の脳裏に焼きついている戦車は、昭和十六年十二月、日米開戦時、日本軍がマレー半島に上陸、シンガポールに南進する戦車隊の映像だった。私は目を疑った。怒とうのように押し寄せてくるソ連軍の巨大な重戦車はけた外れに大きく、口径の大きい一本の戦車砲。まるで大人と子供の喧嘩で、とても勝負にはならない、生命を大切にしなければならぬと思った。

この戦争において、我が中隊はソ連軍の中型戦車一台を擱座し、その残骸を確かに見た。また、日本軍の将兵の中には勇敢な人もおり、我々が蝸壺の中にいる

前を見習士官の一人が、右手に軍刀を抜刀し左手に拳銃を持ち、敵はどこにいるかと言って前進して行った。

あるとき、敵の戦車が天蓋を上げ、一人の将兵が前方を向き前進して来た。ちょうど後方の物陰にいた我々は、距離が至近距離だったので小銃でソ連兵を撃とうとしたら、誰かが、我々の位置が後続の戦車に分かるからやめようと言ったので中止した。

ある晩、指揮班は、軍旗と連隊長を真ん中に円形を組んで守り、残りの全員が二十四時を期して玉砕突撃を敢行した。武器もなく、ごぼう剣をゲートルで木の枝に巻きつけ突入した。この戦闘で部隊はバラバラになり、指揮班は解散になった。戦車を爆破するには、当時は吸着地雷と破甲地雷の二種類があったが、ソ連の重戦車には何の役にも立たなかった。

それから十日ぐらい、何も食わずに水だけで歩き続けた。昼間寝て、夜間行軍が始まった。山の中で、兵士の自殺や餓死の死体に出会い出した。何も食べてないと足が重く、着ている物が重くなり、一つ一つ捨て

て行った。歩けなくなり、その場に座り込んでしまおう兵隊が出てきた。そんなときは、殴ったりけったりして連れて行った。座り込んでしまったら一巻の終わりである。声も出なくなった。

人間、生きて行くため一番大切な物は水、二番目は塩であることが、この行軍の中で頭にたたき込まれた。果たして我々はどこに行くか、不安であった。

誰ともなく、関東軍の作戦計画は、一言でいえば、「満州の広大な原野を利用し後退、持久戦に持ち込み、関東軍司令部は新京を捨て通化に移り、全満州の四分の三は放棄し、最後の抗戦をし朝鮮半島を防衛し、ひいては本土を防衛する本隊は、目下朝鮮近くの凶們に向かって行進している」とのことだった。

戦争だけは絶対するものではないと、つくづく思った。

九月末ごろ、将校が来て、八月十五日、日本軍が無条件降伏したことを伝え、敗戦を知った。兵器や弾薬、日本刀等は地下に埋め、隊伍を整え下山し、ソ連軍によって武装解除を受けた。後で聞いた話による

と、映画と同様に敵に包囲され、両手を上げてソ連の軍門に下った人もあったとのことだった。

この日ソ戦の中では、日本軍の戦車一台、飛行機一機も見ることができなかった。

シベリア抑留

牡丹江郊外の物資蓄積場の引込線から貨車に乗せられた我々一〇〇〇人の作業隊は、昼過ぎに出発する。

いつの間にか綏芬河を通過してソ連領に入る。汽車が一時停止するとき急いで用便を済ませた。

ある大きな駅の引込線に到着した。ここがハバロフスク駅だという声が出た。

朝になり太陽が反対側から輝き出し、夜になると北斗七星に向かって列車は進んでいた。

「ダモイではない、列車は北に向かって走っているぞ、ダマサレタ」。我々は一体どこに行くのだろう。

失望、落胆のあまり、もう声を出す者もいなくなつた。

列車はさらに進み、シベリア鉄道のイズベスト駅の

引込線で下車する。外はすでに雪で銀世界。ここで関東軍の新品の防寒外套、防寒手袋、防寒帽子、防寒靴等が支給され、わりと大きな収容所に入れられた。

イズベストコーワヤは、ハバロフスクからシベリア鉄道本線を西へ約三〇〇キロ進んだ地点にある小都市で、ここから北へウルガル線と呼ばれる支線が伸び、クレドール、テルマ、ウルガルを経てバム鉄道に連絡する。この沿線に収容所が点在していた。

イズベストコーワヤに二、三日滞在し、今度はアメリカ製のトラックにすし詰めされ、夜遅くヤクドニヤ収容所に到着する。

三〇七収容所

ヤクドニヤに設置された三〇七収容所はこの地区の中心地で、周囲には幾つかの収容所もあり、一〇〇〇人の作業隊員はここに移された。ここはシベリア鉄道イズベスト駅からバム鉄道ウルガルに通じる鉄道沿線にあり、独ソ戦争時、この鉄道のレールを撤収し、大砲や戦車等の軍需品に再生したため、日本軍捕虜が入

ソしたときはレールはなく、満州から持ち込んだレールで線路を復旧し、それに関連する重作業が待っていたとは誰も知るよしもなかった。

私は、支給された防寒外套で細々と命を保ち、その下は着たきり雀で、そのうえ栄養失調で体力は消耗し、ただ気力だけで生きているだけの哀れな姿であった。

夜は部屋に寝るとき、体を縦にし頭と足を交互にして寝ると、かなりの人が寝ることができた。しかし、用便に行つて帰つたら、自分の寝る空間はなかった。割り込むのに大変であった。

我々のような貧弱な者だけが休養兵として一室に集められ、炊事係の助手をすることになり、お蔭で食事は腹いっぱい食べられ、多少元気が出てきた。

食事は、満州より運んで来た高粱、大豆、粟等が重要な主食であった。魚類は、昭和初期の樺太の身欠きニシンも、虫が食い枯木のようにだったが、それと同じようなものが魚類として配給された。

ソ連側の発疹チフスの原因となる風の対策は嚴重

で、入浴時に衣類の滅菌消毒、陰部の毛や脇毛はすべて剃ってしまった。

どこの収容所に行つても同じことをやらされた。風呂は日本と違って室内を暖かくし、手桶二杯ぐらいの湯が支給された。

そのうち、我々休養兵（オカ）が、オカ専門の収容所に移動することになった。この三〇七収容所には二カ月からいた。

オカ収容所

ヤクドニヤ地区の各収容所から、休養兵がオカ収容所に集められた。オカとは、栄養失調や病気等で体が衰弱して労働ができない人である。日本軍捕虜達の中からは、最初のオカ兵であった。我々日本兵を警備するソ連側は、収容所長の大尉と上級中尉一人、軍曹一人、計三人で、収容所の将校達はすべてドイツの捕虜となった人達で、シベリアに三年―五年の期間配属されているとのことだった。仕事は全くなく、食べて寝るだけ、本当に休養ラーゲルであった。

食事は内容、量ともに作業大隊よりかなり優遇されて、使役はときどき所内の清掃作業くらいで、入浴も多かったように思う。ヤクドニヤ地区から次々集められた休養兵は、全員で一五〇人―一八〇人くらいだった。

私は老上級中尉に指名されて、衛兵当番となった。片言のロシア語で捕虜達の入出者のチェックと掃除等をし、また一方、ソ連官舎の清掃をした。食事の残り物を食べて、体力はかなり回復してきた。

一カ月ごとにソ連軍医の身体検査があり、体の太った者は三十人くらいの単位で作業大隊に送り返された。私は身体検査を受けず、約五カ月の間この収容所にいた。

日本軍医の老少尉殿が一人常駐していた。十分に体力を回復した私は、隣の作業大隊三〇四収容所に移動した。

三〇四収容所

この大隊は、佳木斯一〇野戦航空修理廠滿州第八三

五部隊であった。本隊は開戦時、佳木斯から列車でハルビンまで行き、武装解除を受けた後、十日余りの行軍で牡丹江まで行き作業大隊を編成、当地に来たのことだった。作業大隊長は早川教重少佐で、作業員は五〇〇人であった。

収容所では数カ月ごとにソ連軍医の身体検査があり、尻の肉をつかんで、一種（重労働）、二種（中労働）、三種（軽作業）、四種（オカ）の四段階に振り分けられた。

私達は、イズベストゥールガル間の鉄道レールを取り外した後の軌道の土盛り、軌道修正、それに付随する伐採、崖斜面の穴掘り、爆破した土砂の運搬等が主たる作業で、工作機械等は皆無で、すべて人力でやった。

厳しい自然や労働と対決するための食事は、兵は黒パン一日三五〇グラム、将校は三〇〇グラム。階級作業、ノルマの達成状況によってパンの量が増減された。ビタミンCの補給として、松葉湯をよく飲んだ。

じっとしている時は絶えず足踏みをした。油断する

とすぐ凍傷になり、特に鼻、耳、手足に注意した。

零下四十五度以上になると作業は中止となる（一回あった）。四月になると春の気分となった。六月中旬ごろになると、落葉樹や白樺の芽が吹き出し、ツツジやシャクナゲが咲き誇り好季節になる。

特に夏の炎天には、ブヨとアブの大群に往生した。

十月になると結氷期に入った。収容所での南京虫には悩まされた。壁の中で、特に天井などになると手に負えるものではなかった。いつも塗り直しの繰り返しで作業はかどらなかつた。

汽車が通る両側の崖の斜面を修正のため、岩に穴を開けダイナマイトで爆破した土砂を手押し車（ターチカ）で運ぶ作業は、ノルマ達成のため競争であった。

松茸は三〇四収容所の裏山には無数に生えており、よく食べた。

三〇四収容所で逃亡者が出た。遠く離れた異国の僻地において、なぜ逃走したのか、真意は分からない。

おそらく満州領に入る計画だったと思う。この地のシベリアで死をかけての逃亡だ。食料もなく、地理も言

葉も分らない。ただ星だけを頼りにあちこちをさまよったことと思う。二、三日でつかまり収容所に送り戻された。みんなの前に連れ出され、ソ連側より、このような馬鹿なことほしないう厳重に注意され、営倉に入れられ、いつの間にか懲罰収容所に移されていた。

人間、働かされる中に「眠」を忘れてはならない。とにかく寝かさないで働かされる。気が狂いそうになる。このことをシベリア抑留中に体験した。

排便の始末にも困った。当時紙は貴重品で、ソ連は紙、硝子等満州から徴収した。作業に出たときは草で始末したが、収容所にいたときは、衣類の中に入っている綿を少しずつ取り出して始末した。

昭和二十一年春ごろより、ハバロフスク発行の『日本新聞』の配布により次第に民主運動が起き、逐次に階級意識も薄らいできた。

戦友達の話は、ほとんど食べ物の話ばかりで、郷土料理や名産品が紹介された。そうして思い出すのは故郷のことであり、父や母、妻や子供達、兄弟姉妹、恋

人達への思慕であった。「帰りたいなあ」という嘆息が出るほど、やりきれない望郷の念に駆られたのである。

部屋は二段式ベッドで、四人一組で居住した。真ん中にペーチカがあり、室内はかなり暖かかった。

シベリアの休日は、一月一日の正月、五月一日のメーデーと日曜日であった。

三〇四収容所での作業は終わり、教班に分かれ、さらに奥地の収容所に移動した。これだけ大勢の者が集まっても、女性の話が全然出ない。本当に不思議なことだった。

三一〇収容所

三〇四収容所から別れた我々は、ヤクドニヤを通過して三一〇収容所に到着した。

この収容所は、食堂、医務室、浴場は丸太小屋だったが、寝舎は幕舎で、木造兵舎は建設中だった。作業人員は五〇〇人くらいだった。

ソ連側は収容所長と数人の警備兵がいるだけだっ

た。作業は、鉄道沿線に沿っての排水溝作りがほとんどで、歩哨もおらず気分的に明るく、作業も比較的楽で開放的だった。

この収容所では洗脳教育が行われた。夜になると夕食もそこそこに教育を受けた。帰国という願望がある以上、積極的に学習に出る出ないということは大変なことだ。参加しなかった者は、我々がダモイの時にさらに奥地へと移動させられた。

この教育で思い出すのは、天皇制批判であった。彼の言うには「万世一系と言うが、天皇の中には女天皇（持統天皇）もあり、歴代の天皇の中には一〇〇年から一五〇年も在位者がいる。また、後醍醐天皇の時代、天皇が南北と二つに分かれ、吉野の朝廷（南）と京都の朝廷（北）が並び立つ時代が五十六年の間続いていた」とのことだ。

昭和二十二年五月ごろ、赤十字マークの入った捕虜用郵便葉書に、日本の家族宛に全文片仮名で便りを書いた。内容は、ただ元気でいることを知らせた。この葉書は、無事に内地の両親のもとに到着したとのこと

だ。

帰国の第一回目は、収容所の中で一番の年配者一人だけ帰国した。引き続き我々の帰国が決まった。それとは反対に、労働不振の人、洗脳教育を受けなかった人達は奥地へと転送された。

帰国が決まったら、全員がスターリンに感謝文を書くことを強要された。私は半信半疑であったが、心ははやった。ソ連側より上級将校（佐官クラス）が来て、「君達は近く帰国することになった。帰国したら民主運動に参加し、労働組合を起こし日本再建のため活動するように」と檄を飛ばした。

この収容所では蕎麦が配給となり、穀つきのままのを食べた結果、便が硬くなり、七日以上も排便がなかった。糞詰まりとなって気分が悪くなり、医務室で石鹼水で洗腸するも排便ができず、最後の手段は、衛生兵が肛門に指を入れてかき出すという滑稽なことが起きた。この収容所には前のオカの老軍医殿がいた。

帰国の貨車が到着した。我々は松などで貨車を飾り付けた。列車はヤクドニヤライズベストコーワヤーハ

パロフスクーナホトカ港に向かつて進行した。貨車の中では、毎日のように演劇会が開かれた。この収容所には四カ月いた。

ナホトカ港 夢の帰国実現

収容所に入る前に広場に集められた。体に異常のない者はそのまま、過去病気をした者、現在体に異常のある者は右手を上げ、一步横に出るようと言われた。私は迷ったが後者を選んだ。二つのグループに区分され、前者はナホトカの作業大隊に、後者は帰国の収容所に送られた。人間の運命なんてわからないものだ。一寸先は闇だ！

まず身体検査を受け風呂に入り、下着類等は新品に着替え一新する。夕方より、日本人捕虜達による「軽音楽の夕べ」を鑑賞する。音楽を聞くのは本当に久しぶりだ。平和っていいなあーとつくづく思った。

ナホトカの収容所で、敗戦後初めて電灯を見た。文化のありがたさがつくづくとわかった。

ナホトカの港は深く棧橋はない。岸壁にすぐに大型

船が接岸できる。八月九日入港の第一大拓丸の船尾の日の丸を見た時は、万感胸にこみ上げた。

乗船場でソ連将校が一人一人の姓名を呼び上げ、私達は日本船のタラップを上った、「帰ろぞ、日本に帰ろぞ」と一言一言つぶやきながら。甲板の上には日赤の看護婦さんが一人一人にご苦勞様と言ってくれ、涙が出そうになる。

ふと、二年前の日ソ開戦、シベリア抑留のことなどを走馬灯のように思い出した。残った戦友達はいつ帰れるか、後ろ髪を引かれる思いがした。

夕方、第一大拓丸は岸壁を離れ舞鶴港に向けて出航した。「万歳、万歳」と叫んだ。本当に夢にまで見たダモイが実現したのだ。感慨無量だった。

私は、どういうわけか梯団本部付になった。日本海洋上で一夜が明けた。米飯と味噌汁、たくあん、塩昆布の朝食が配給され、二年ぶりで懐かしくうまかった。おふくろの味がした。また、歯ブラシ、歯磨粉が支給された。

誰となく「日本だ、日本だ」という叫びが出た。み

んなが甲板に向かって走り出た。船はだんだんと陸地に近づき出した。船内で戦災地図を見たが、松山市は全焼していた。両親や弟は元気で暮らしているのだろうか、心配だった。

港の入り口の岬や松林が墨絵のように見え、今までのが悪夢のように思えた。とうとう日本に帰った。夢でないのだろうか、錯覚を起こしそうになる。

本部付で帰国したため、丸二日間連続で米軍に、シベリア抑留地について詳細な取り調べがあった。

舞鶴―京都―大阪―岡山―宇野―高松經由で松山駅に降りた。それは忘れもしない、昭和二十二（一九四七）年八月十五日十三時ごろだった。時に私は二十一歳七カ月だった。

【執筆者の紹介】

大正十五年二月、松山市の雑貨商の次男として生まれる。

愛媛県立松山商業学校に入学。勉学の方も上位の成績であり、小学校四年生ごろから始めていたスポーツ

は、主として中距離ランナーとして一五〇〇メートルと二〇〇〇メートルを得意とした。商業学校に入学して初めての全校生徒のマラソン大会には、一年生でありながら三位となり、否応なく陸上部に入部させられた。昭和十五年秋、檀原神宮大会にも県代表として選ばれて出場、優秀な成績を挙げ、美男のスポーツマンで均整のとれた体はうらやましいくらいでした。その彼も、昭和十八年一月には南満、鞍山市の東亜旅行社（日本交通公社）案内所に、学友の仙波榮分君と張り切って赴任、入隊までの二年と四カ月を社会人として戦時下にあっても立派にお勤めをしたが、遂に昭和二十年五月十八日、綏陽の東、ソ満国境の綏南第一二四師団の歩兵部隊に入隊した。ここで一カ月半の初年兵教育を受けているところに、師団は牡丹江東三〇〇キロにある穆稜街付近へ陣地移動をした。

一二四師団は五軍に属し、歩兵部隊八四八部隊は二七一、二七二、二七三連隊の三個連隊からなり、主として仙台、若松、山形出身で固められていた。野戦重砲の一大隊（Fa 20）、独立重砲の一中隊、東寧重砲の

一中隊、迫撃大隊、工兵大隊を擁し、軍司令官清水規矩中將の指揮に委ねられた。開戦一日からソ連の熾烈をきわめた攻撃にもよく奮戦敢闘して、十二日に全面的に主陣地を突破されるまで四日間の不眠不休の戦いで、本文中にもある通り、一五〇〇〇の兵力で生存者は一二〇〇人に過ぎなかったのである。その後は本文通りのシベリア抑留の労苦に明け暮れたが、運の良かった氏は昭和二十二年八月、無事帰国した。

復員はしたが、シベリアの民主化教育が災いしたのか、なかなか就職ができなくて、進駐軍の日雇い、水産物製造業会（統制組合）、乾物の卸業を自営したり苦難の連続だったが、昭和三十四年四月に東洋工業（現マツダ）の愛媛県ディーラーの伊予マツダ販売（株）に就職。折から自動車ブームの時代に入り、社会も会社も良き時代であり、戦後のシベリアなどの苦労が役立ち、販売成績もグラフは他の同僚よりズバ抜けてよく活躍され、全国表彰を三回も受賞したとお聞きしています。

息子さんは二人とも大学を卒業、社会人となられ、

六十一年四月、会社を定年退職して間もなく、好事魔多しの諺ではないが、糖尿と動脈硬化による脳血栓で倒れた。右手の麻痺と言語障害が後遺症として残りましたが、現在はこのリハビリと機能回復に努力し、県の高齢者通信大学を卒業し、リハビリを兼ねて民謡、吟詠、カラオケに没頭して、平和な日々を送っております。愛媛県支部会員としてご協力をいただいております。

(愛媛県 山本 繁夫)

望まなかったシベリア放浪記

愛媛県 金 柁 弘

はじめに

抑留中、同胞により、いわれない事柄を誣告され、弁解弁護もかなわず戦犯という烙印を押され、ソ連戦時刑法とかで一方的に有罪判決を受け、獄中生活を強いられ、刑期を全うしたり、減刑された方はまだ

しも、獄死した方々、また抑留中の作業などで亡くなられ、永遠に日本の春を迎えることなく、凍土の下に眠り続けている戦友をしのびつつ、あなたたちの犠牲によって生還できた者の一人として、謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りするとともに、ご遺族の方々におかれては、さぞかし無念の日々が続いているものとご推察いたしております。復員後半世紀を無為に過ぎ来たことを反省しながら、一個人としてはどうしようもない空しさを感じながら、スターリン時代のソ連と、民主国家の仲間入りをしようとしている現ロシアを比べ、猜疑心が強いことなど、余り変わらないと思っっているのは私だけではないと思います。悪夢であったシベリアのことを私としては語り継ぎ、言い継いで行かなければならない義務を感じております。しかし、私たちがこのような不幸を味わった原因は、戦争という争いごとであったことを考えれば、絶対平和を守らなければならないと思います。二十一世紀を目前にして、語り部も年々少なくなっている今日、私としてこの機会を得たことは幸せと思っております。